

## <被表彰者の功績概要>

### (1) 教職員

#### ① 高宮 綾子（亀山市立井田川小学校 主幹教諭）

本県公立小学校教諭として着任以来、それぞれの赴任校の教育課題に向き合い、めざす児童像・学校像の実現に邁進している。教育行政にあっては、教育研究所研修員として「亀山市特別支援教育ハンドブック」の作成に貢献し、また、指導主事としては国語科の指導技術の向上を図るなど、亀山市の教育充実に貢献した。

平成 24 年度に亀山西小学校で研修主任を務め、算数科においてグループ活動を効果的に取り入れた指導の研究を推進し、児童の学力の向上及び教職員の指導力の向上に成果をあげた。

平成 27 年度には主幹教諭として井田川小学校に赴任し、学校全体の運営に参画しながら研修体制の充実に図り、平成 28 年度からは、本県の道徳教育推進会議の委員として県内における道徳教育の一層の充実に貢献している。

#### ② 森 康（尾鷲市立矢浜小学校 教諭）

本県公立小学校教諭として着任以来、児童理解に基づく授業実践を重ね、学習指導や学級集団づくりにおいて高い指導力を発揮している。特に平成 23 年度からは津波防災教育カリキュラムの実践化を進め、防災マップづくりや標高掲示板の設置、地域住民と連携した避難訓練の実施など、市内の津波防災教育の推進に貢献している。

また、平成 24 年度から 2 年間、三重大学コア・サイエンス・ティーチャー（C S T）養成プログラムに参加し、その後は理科教育推進における地域のリーダーとして積極的に活動し、本県や地域の理科教育の研修講座の講師を務めるなど、教員の指導力向上に貢献している。地域においても「青少年のための科学の祭典紀北大会」の企画運営に 10 年以上関わり、児童生徒や住民の科学への興味・関心の喚起にも貢献している。

#### ③ 稲木 保美（玉城町立下外城田小学校 教諭）

本県公立小学校教諭として着任以来、児童や保護者からの信頼を受け、学習指導・生活指導の両面にわたって高い指導力を発揮している。

特に平成 26 年度に下外城田小学校へ赴任し、同年度から玉城町教育委員会が取り組んでいる小学校における英語コミュニケーション力向上事業において、公開授業や教職員研修などに取り組み、中心的な役割を果たした。また、平成 27 年度には英語教育推進リーダー中央研修に参加し、指導力向上に努め、度会郡内や同町の研修会において授業実践を発表するなど、自らの学びの情報発信に努めた。

平成 28 年度は、研修の成果を活かして県内の教職員を対象とした英語教育推進研修の講師を務め、本県の教職員の指導力向上に寄与するとともに他市町からの指導方法等の問い合わせにも丁寧に対応し、各方面から厚い信頼を得ている。

#### ④ 渡辺 忍（亀山市立関小学校 教諭）

本県公立中学校の理科教諭として採用され、平成 5 年度からは公立小学校教諭として、環境教育や国際理解教育の研究・実践に取り組んだ。

平成 16 年度から 4 年間、適応指導教室指導員として不登校の児童生徒への適応指導に携わり、平成 20 年度、亀山西小学校に赴任し、通級指導教室における指導のあり方について研究・実践を重ねた。こうした経験を踏まえ、通級指導教室担当者連絡会の設置をはじめ、適応指導教室と通級指導教室が密接に連携して児童生徒を支援する亀山市独自の指導体制

の確立に向け、中心的な役割を果たした。

平成 26 年度、関小学校に通級指導教室が開設された際、その指導者となるとともに、市内の教員の指導力向上、関係機関との連携強化に多大な効果をあげた。

#### ⑤ 長田 淳（川越町立川越中学校 教諭）

本県公立中学校教諭として着任以来、技術科をはじめ、ICT 教育の推進及び情報教育環境の整備・促進に向けて研修と実践を重ねてきた。

平成 16 年度は三洲中学校技術科教育研究協議会の会長を務め、地域の技術科の指導方法の充実に寄与し、東海・北陸地区中学校技術・家庭科研究大会において研究成果や実践を発表した。

平成 21 年度からは四日市市教育委員会の指導主事となり、市内全小中学校の全教室への教育機器の導入をはじめ、全小中学校 62 校を巡回し、ICT を効果的に活用する授業について指導・助言を行うとともに、各校の要望に応じて出前講座を行うなど、授業改善や若手教員の指導力向上に貢献した。

現任校においても教務主任、進路指導主事を歴任し、学校運営の改善や生徒への指導の充実、若手教員の育成等、同校の教育の発展に貢献している。

#### ⑥ 東端 伸治（伊勢市立小俣中学校 主幹教諭）

本県公立中学校教諭として着任以来、教育活動全般について高い識見を有し、誠実で温厚な人柄による的確な指導により、教職員、生徒のみならず、保護者からの厚い信頼を得ている。

陸上競技部顧問としては、平成 10 年に女子 100 メートルハードル全国大会 5 位入賞に導くなど、全国規模の大会に生徒を送り出し、個々の生徒に応じた適切な指導は、生徒の競技力の向上はもちろんのこと、心の成長にも大きな影響を与えた。また、長年にわたり三重県中学校体育連盟の役員を務め、平成 16 年度から常任理事として 3 年間、その後 9 年間は陸上競技専門委員長として、本県の陸上競技界の発展に貢献している。

平成 27 年度からは、主幹教諭として学校運営の中核を担うとともに、陸上競技部の顧問として、生徒への一人ひとりに寄り添った指導に尽力している。

#### ⑦ 長谷川 八兄（三重県立飯野高等学校 教諭）

本県公立高等学校教諭として着任以来、美術科教諭として、高い専門知識を活かし、本県の美術科教育の発展に貢献している。特に、専門分野の彫刻指導において、古典的で写実的な作風から現代的で抽象的な作風まで幅広く指導し、優れた能力を発揮している。

また、生徒の独創的・総合的な見方や考え方を培い、豊かに発想し構想する能力や創造的に表現する能力を的確に育成しているほか、県内最大規模の公募美術展である「みえ県展」に出展させ、第三者との対話や議論による生徒自身の気づきを通して、さらに質の高い創造的な表現へと向上させていく指導力は、卓越したものがあり他の教職員からも高く評価されている。

さらに、鈴鹿市主催の美術展において長らく審査員や運営審議会委員を務めるなど、同校と地域との連携に大きな役割を果たしている。

#### ⑧ 松矢 加奈子（三重県立北星高等学校 教諭）

本県公立高等学校教諭として着任以来、それぞれの勤務校において家庭科教諭として教科指導力の向上に努めるとともに、特別支援教育に係る専門性を高めてきた。特に、三重

県立北星高等学校では、平成 24 年度から教育相談担当として、様々な背景を抱える生徒に対して、行動や言葉の裏側にある心理的な意味を理解し、生徒の自尊感情や充実感を高めるよう取り組んだ。また、特別支援教育コーディネーターとして、スクールカウンセラーや市町の福祉課等と連携し、専門的な支援方法を校内に導入するとともに、ケース会議を開催し、日々の生徒対応に苦心する他の教職員へ情報共有やアドバイスを的確に行う等、組織的な生徒の支援体制を構築した。

さらに、平成 27 年度、文部科学省の指定事業を受けた同校において、合理的配慮のための校内体制整備等について実践研究を行い、その中心を担った。

#### ⑨ 生川 きみ江（三重県立盲学校 教諭）

本県特別支援学校小学部教諭として着任以来、聴覚障がいや視覚障がいのある児童生徒に対し、高い専門性を持って個々に応じた的確な指導や支援を行ってきた。

特に、三重県立盲学校においては、平成 20 年度から小学部を担当し、平成 26 年度から小学部主事として学部のまとめ役の任を果たしながら、点字の指導法に優れた能力を有する同人は、指導的な立場で各授業において、自らが生徒対応の模範を示し、他の教職員の専門性の向上に努めた。

また、同人は平成 22 年度から特別支援教育コーディネーターとして、児童生徒への適切な支援のために、関係機関等との連絡・調整を行っているが、さらに、視覚障がいのある就学前の乳幼児やその保護者への早期教育相談等の取組を通して、個々の発達や特性に応じた適切な指導・支援を行った。

#### ⑩ 箕田 昭子（高田高等学校 教諭）

生徒募集の一環である学校見学会の運営を担当している。少子化に伴い、喫緊の課題となっている高校の生徒募集のため、見学会への参加者増と参加者の満足度向上を目標として運営し、その成果を挙げてきた。

文芸部顧問を 28 年務め、学校文芸誌『木馬』の編集を毎年行っている。

三重県高文連の文芸部門である三重県文芸連に同校文芸部が加盟して 9 年経つが、そのうち全国高等学校総合文化祭文芸部門に 7 回のべ 14 名の部員が出場した。また、全国高校生短歌大会（短歌甲子園）に 3 年連続で出場している。昨年は富士正晴全国高等学校文芸誌賞（文芸誌甲子園）で奨励賞も受賞した。平成 25 年から三重県文芸連の事務局長を務め、積極的に活動を展開するとともに、機関誌『高校文芸みえ』の編集も行い、県内の文芸活動を推進してきた。

平成 21 年 11 月にキャリア教育の振興を図ることを目的として設立された「三重キャリア研究会」の副代表を設立当初から務め、県内の教職員を含め、諸団体や他県の大学教員との研究会を年 4 回開いて、今後の教育の在り方について話し合っている。

### (2) 教職員組織

#### ○ 松阪市立三雲中学校教職員一同

平成 23 年度から平成 25 年度に総務省のフューチャースクール推進事業及び文部科学省の学びのイノベーション事業を受け、生徒一人に 1 台ずつのタブレット端末がある ICT 機器環境を活かした授業実践などに取り組み、平成 26 年度からは文部科学省及び松阪市の事業を受け、同校がこれまで研究実践により積み上げてきた内容を市内の学校へ広く伝えるなど、同市の教育情報化の発展に大きく貢献している。

同校では学校組織として、学校長によるリーダーシップを発揮した学校運営、革新的な

学習活動、継続的な教員研修のもと、理想的な学習環境を整備し、実践研究を推進している。現在も、ICT機器を活用して生徒同士が互いに学び合う協働学習と対話的・主体的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を促進する学習を展開し、研究を継続するとともに、公開授業研究会の開催や全国からの視察の受け入れなどを行い、その成果を発信し続けている。